

受難週・「恵みの御言にゆだねて」
詩篇55編22節

使徒の働き20章19〜38

(1)

お互いに、いつ別れても悔いが残らないように、出会いの瞬間瞬間を大切にしたいものです。今朝、みなさんと共に礼拝できる最後となりました。お互いに、次の週の礼拝にあずかれるという保証はどこにもありません。今朝の礼拝が最後かもしれないという思いをもって、常に礼拝に臨まねばなりません。

17世紀のイングランドは、激動と混乱の時代でしたが、「リチャード・バクスター」牧師は、常に終わりの時を意識して説教したといえます。「わたしは、もう二度と説教する機会はないと思いつながら、死にゆくひとりの人間として、死にゆく人々に向かって説教した」と言います。

おそらくは、使徒パウロも、こうした思いで別れの説教をしたと思われると思います。

教会に指導者がいなくなる時がきます。韓国の教会では、軍部独裁の時代に、多くの牧師たちが投獄さ

れました。また日本でも、近いうちに、無牧の教会が多くなる気配を感じます。

数年前、神戸の宣教大会でいただいたブック・レットを拝見して驚きました。日本の牧師の平均年齢は、67・8歳。しかも40代以下の教職は10パーセント、一教会あたりの受洗者は、何と1パーセント以下とありました。わたしたちの気づかないところで、日本の教会の足もとは危うい状態にあるようです。

ところで、ミシトの港で、エペソの長老たちと今生の別れをした際に、パウロの語った言葉の端々には、教会に監督・牧師が不在となる時を予測して語ったと思われる言葉の数々が伺えます。

エペソとミシトは直線距離にして、約60キロから70キロ、徒歩で二日の行程です。パウロは、ミシトの港から、遠く離れたエペソの地に人をつかわし、エペソの長老たちを自分のもとに呼び寄せた、涙ながらに別れの説教をした使徒パウロの姿があります。そこには、4回も「いま私は・・・いま私は」(22、25、26、32)という思いを込めて、涙して語った説教

が18節以下です。

「皆さんは、私がアシアに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるかわかりません。ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私に、はつきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っている、と言われることです。けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません」。

(18-24)

パウロの手により開拓されたロ

ーマ・コリント・エペソ・テサロニケなどの教会の中で、エペソの教会は、パウロの晩年、しかも、最後に手掛けた教会でした。

パウロがそれらの地に滞在した期間は、驚くほど短く、大半は数ヶ月、長くて半年位です。ところが、エペソ教会では、三年ほど滞在しています。それだけに、パウロが入念に牧会した教会でもあります。世にある教会は、常に平穏・無事とは限りません。一千年の教会の歩みを顧みますと、内外から、さまざまな試みに合っています。

29節「わたしが去った後、凶暴な狼どもが、あなたがたの中に入りこむ」とあり、29節、30節「いろいろ曲がったことを語って、弟子たちを自分の方に引き込もうとする者たちが起こる」ことに警戒し、注意しなさいとあります。特に、エペソの教会の群れを指導・牧会するであろう長老たちが特に注意すべき大切なポイントが挙げられています。

(2)

先ず、28節です。

「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、

神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」

岩国市周東町の「周東のぞみキリスト教会」は、周囲の人々が何と見ようと、「神がご自身の血をもって買い取られた神の教会」ではありません。単なる人間の集まりではありません。「ご自身の血をもって買い取られた教会」とあります。

地上の教会には、群れを指導し、監督する「牧師・長老」が立てられています。しかし、「聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会」とあります。「聖霊が」とあります。どこまでも人間の思いや考えが中心となってはなりません。

熱心に伝道して、多くの礼拝者が集ったとしても、イエス・キリストが十字架の上で流された尊い血潮の代価により買い取られた神の教会であることを、ユメユメ忘れてはならないのです。

「牧師・長老」は、世間で言われているような管理職でも名誉職でもありません。

使徒パウロは、「謙遜の限りを尽くして主に仕えてきた」(19)とい

うのです。これが長老たちの模範であります。

群れを見守る者は、神がご自身の御血をもって買い取られた神の教会を謙遜の限りを尽くして牧会し、主に仕えねばなりません。

(3)

さらに大切な箇所は、31節と32節にあります。「私が二年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、信仰の目を覚ましていなさい。そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます」。あらゆる注意をし尽くしても、最後には、神とその恵みのみことばとにエペソの群れをゆだねております。

後に残される群れのあれこれを心配していたことであろうパウロなのですが、今となれば、すべてを、主の御手にゆだねるしかありません。

どこか子育てと似ています。手を入れ過ぎてダメ、口を出し過ぎてダメです。わが子の将来を明るく見据えて、ゆだねながら育てることがベストといえます。しかし、そつと分かっていても、なかなか

か委(ゆだ)ねきれません。

泳げない人ほど力むものですから沈んでしまいます。わが身をゆだねれば浮かぶ瀬もありということになります。

「恵みの御言葉にゆだねる」ことは、どいほど強調しても、強調し過ぎることはありません。多くの場合、困難に出会えば出会うほどゆだねられません。自分の知恵と工夫と努力で、なんとか切り抜けようとしています。

「ゆだねる」という行為は、必ずしも、無責任な生き方ではありません。むしろ、ゆだねることのほうが、はるかに難しいのです。

いずれ、内外からさまざまな迫害や試練を受けるエペソの群れであることを十分察知していたパウロです。それでも、エペソの群れを主にゆだねながら、エルサレムに向かわねばなりません。神とその恵みの御言葉とにゆだねざるをえません。御言葉には教会を建て上げ、神の恵みを受け継ぐ力があると信じていればこそ、パウロはすべてをゆだねたのです。

詩篇55編の22節には、「あなたの荷を主にゆだねよ。主はあなたを支えられる」とあります。

「ゆだねよ」のヘブル語は強調形です。「投げ出せ」とも訳せます。「投げ出す」「THROW OUT」。「群れを主に投げ出せ」・「主の恵みの御言に」、その群れをゆだねよ」でもあります。

「ゆだねる」ことが、すべてに勝って確かなことだからであります。恵みの御言葉にゆだねれば、いかなる事態も乗り越えられるからです。

あなたがたも、私パウロがしたと同じように、いかなる事態と直面したとしても、「ゆだねる」ことを学んで欲しい。特に、群れの指導者として立てられている「長老」たちは、恵みの御言葉に、残りなくゆだねることを学んでほしいと願われています。

「絶えず神に感謝しているのは、あなたがたが私達から神の使信の言葉を受けた時、それを人間の言葉としてではなく、事実どおりに神の言葉として受け入れてくれたからです。この神の言葉は信じているあなた方の内に働いているのです。(テサロニケ前2:13)。

今朝、おこがましいことは承知の上で、大伝道者であるパウロ先生に習って、「あなたがたお一人お

ひとりを、主の恵みの御言葉にゆだねます」「と言えなければ、安心して、みなさんとお別れすることはできません。ゆだねることのできるお方と、ゆだねることのできる恵みの御言葉にすべてをゆだねることが許されていますから、安心して、皆さんとお別れすることができません。

最後になりました。

パウロは別れ際に、エペソの長老たちとミレットの海岸にひざまずき、祈りを捧げました。互いに抱き合い、泣きながら、パウロの首を抱いて接吻しました。

別れ際のパウロの挨拶は「シャローム」であります。

主イエスが天に昇られる時、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と弟子たちに「インマヌエル」の約束をなさいました。

パウロとエペソの長老達とは、これが今生の別れとなるであると知ればこそ、パウロは、「神とその恵みの御言葉とにゆだねます」と祈りながら別れました。

【祈ります】